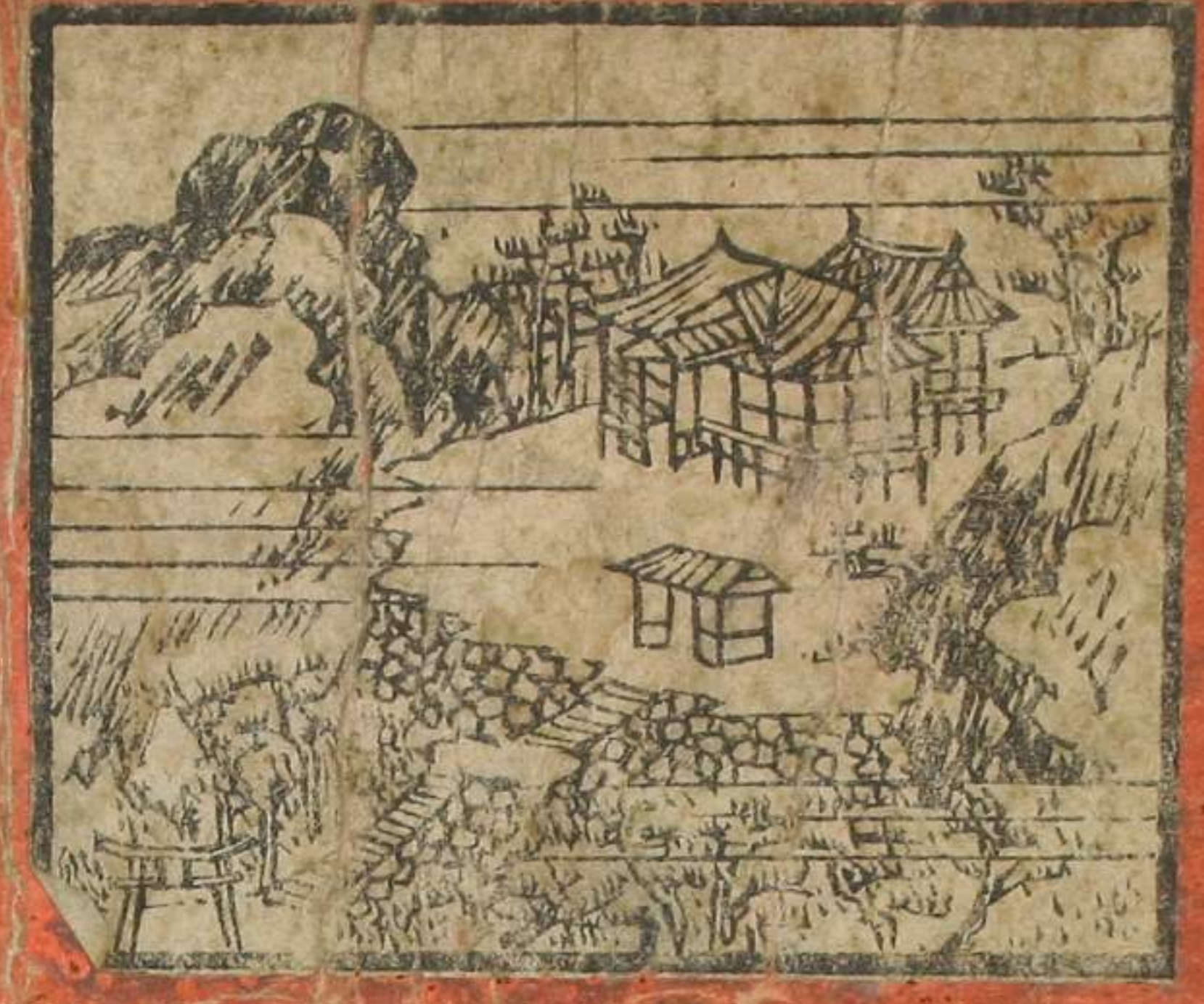


江の崎
浜を

濱のさざ波

完



日本橋	品川	川崎	金川	程谷	戸塚	藤沢	江島	日本橋
へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ
二里	二里半	二里半	二里九丁	二里九丁	二里	二里九丁	二里半	二里半

ル 4
5327



門ル 4
5327
巻



49-1887

分類 343
通巻 343



濱のきざ波もちよも。志のひるすのうらもあま。
るも後うぐいしはさし。毛とより旅のやまも入の。
海よりるは。かかたうらと。日本橋より筆をいそ。
持のあはするまのうら。あたるまを序に訳すの。
名所曰跡古より。素歴唐の火和の穴さし。
ちつしうづり小綴り。切我学尚村学究。
都々平丈我乃たすつ。百姓のあの中る入る。
おきあもあはぬき。いあう。當時はありのこれだ。
其流りおたれ。見えし。精くま。
筆もあうせ。いあ本院百味講の連中。
ちつしうづり。けてあう。か。の。うら。あ。あ。
らん。板元の工夫。い。あ。あ。の。口。も。あ。う。あ。

金壽山。光世あふぐ謙愈の。扇がに合もふと立ちく。
舞のひとりのの袖が浦。静なる世のあめり。同者
つとめこころえの杖とあめのみ。角様さ。こころのり
ひてよするこころのい。

水上清き玉川の。玉なすあふこが湯
して。江戸此業のなまり負ても。色も深
男半。又。茅と羅金鶏がめすれり。み。

我は骨強の江戸ッ子

平亭銀鷄誌



凡例

- 一 此書江の島ゆづり人の便りなり。やと日本橋より筆を起し江の島までの道法を委し。其間の名所苗跡と云り。驛々の圖を諸名家の筆と著し。加ふるに名家の詩歌と題す。又此書を見久人の眼と云ふこと。人か為さる。
- 一 原より此書傳覧の大人も小見する。小あつて只旅客の心え。つむらふこと考へ。江の島の圖と云り。驛舎の名取。西町東町のゆうれを記し。参詣の順路。山内の古跡。江の島各産。百味講の價旅籠宿の直段。と云ふ。細く。あつて。い。と。ま。ま。さ。る。わ。が。う。あ。ま。も。道中不安内の人とみちびく。第一の便りと云はれけり。
- 一 江の島の采由名。処。旧跡。寺。諸書。ふ。の。ま。る。え。す。主人の説とも其す。中たれば。は。ち。が。ひ。い。も。あ。じ。く。る。ん。と。元。名。処。と。云。り。思。ふ。ふ。め。を。お。し。う。て。む。な。ふ。あ。つ。て。江の島は。う。と。題。も。ち。や。の。事。が。れ。旅人の得する。と。ま。ま。と。耳。と。首。う。て。取。て。穿。鑿。の。論。う。か。す。め。り。

凡例

一 未だ道中のころに二十ヶ条并ふ所持たる茶方二方といふ是皆年
 来経験の良方にして此書とあむし至りて是彼の書より抜かざりしに
 用ひて其効を知りし
 一 江の嶋より鎌倉へ行くの間不記すま事いとおありしと云ふはよく鎌倉はむし
 江の嶋より此書より其道のりと云ふして来由と云ふ龍尾固瀬川腰越七里
 瀬のちち小立跡頗るなり後日発兌の時待ててんまふ

あつまつをそのむむ林のむむと云ふはむむ固のむむ代 金雞
 かまうがむむ君の齡やうむむむむむむむむむむむむむむむむむ 橘洲
 らんむむの姿のむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ 真顔
 君の代むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ 馬琴
 と云ふはむむ固の光りも獲むむむむむむむむむむむむむむむむむむむ 銀雞

江の島
 濱のさざ波

江戸

平亭銀鷄撰

銀雞

日本橋

日本橋の品川へ二里

此橋は江戸の中央より一橋のむむむむむむむむむむむむむむむむむむ 橋
 長サ二十八町あるむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ 橋
 幅亦むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ 橋
 と云ふはむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ 橋
 浮後亦むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ 橋

俗にこれを二石橋といふなりまは橋を八つ見の橋と
 もいふる橋より見れば日本橋江戸橋長板橋船橋後
 橋及三橋常盤橋とありてかくあつけりといひ
 銀鷄云日本橋の石敷を三十二石と記せる書ありあり
 又つら頃なりといひこれの書も年号を元禄を改すり
 の年代記に元禄元年小町と記す又大江戸春秋に
 書に元禄元年小町と記すなり
 熊阪邦

諸侯玉帛見陶鈞。日本橋頭起紫塵。天外芙蓉回望出。江
 邊樓閣入看新。彩雲高傍黃龍閣。碧水遙通白馬津。南去
 北來皆此路。相逢半是官遊人。

通町 四丁 中橋南傳馬町 三丁 京橋 長サ十二石
 銀座 四丁 尾張町 二丁 竹川町 出雲町 金六町

新橋 芝口三丁 源助町 小橋有 露月町 芝井町

宇田川町 振川 土橋有 神明町 右は芝神の宮あり

濱松町 四町左小橋有 金松橋 合松町 芝橋本芝 四丁

田町 九丁あり四丁目と 元九の辻といふ 芝橋より八町是より右の方西のと

びやくとあり衣の方小三回八幡の宮あり海邊の
 綱が守り本宮といひ此所の芝の熱門八田町九丁目

あり日本橋より四十六町半芝橋より十四町なり。江戸妙子
 小の三田切運寺の境内小綱が塚と称するあり海邊松

との小會津彦山下を登の内はあり。申の年の田
 録は亡びたりといふすて綱が旧跡ハ此處小町あり

系中大畧抄書小ありいすといふも里人の後説

五景

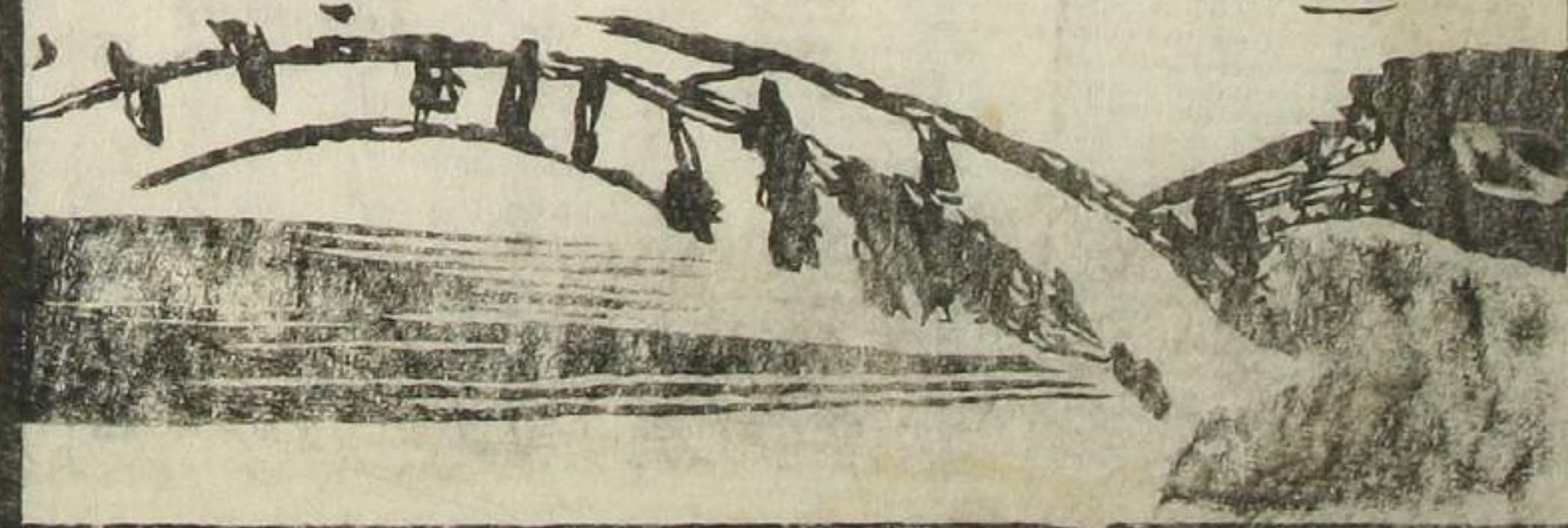


昨閣汝能船
可居魚可過

松也



日午橋市



長江の舟は

無法

多き舟は

舟

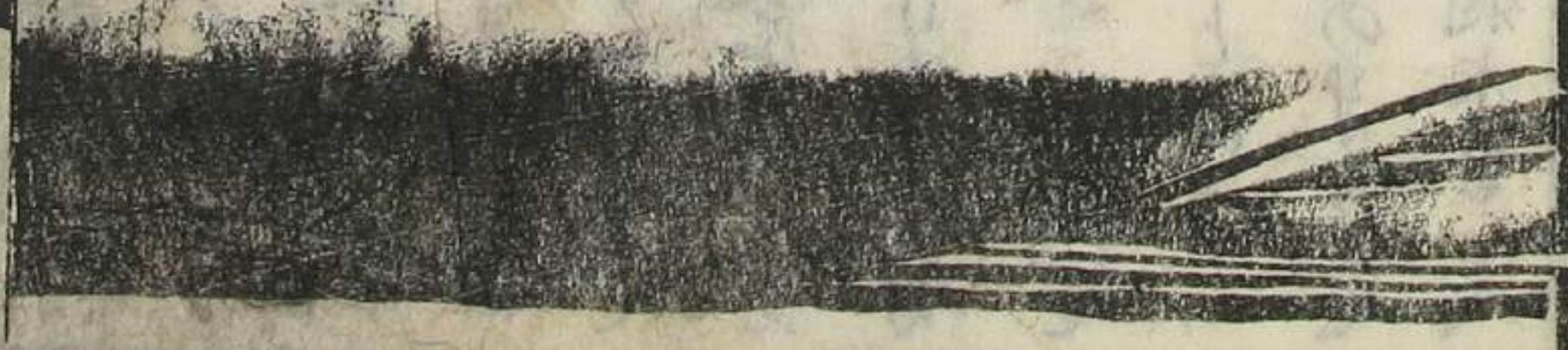
水好山奇生

日午舟の橋

柳庄市橋去

雨是初程

五山人



のこゝと其燈とをさる処丹波の峯翁の箕田園の池
とあるは里人の虚説なりと云ふこと初めて明かりを
元小武蔵藤原源朝法谷の在箕田の邑八源綱藤跡
なり網老て仕へと辞しは処は終る志ありしこの
ころのころの星霜とあるといふもそ塚が存在
あるのころのころの塚の上小松と云ふて遺蹟を標す必
これ世氣の早く散せむ千歳の餘情あるのの响
の頃會津侯は地を賜たりお庄とありあふ今も塚と
あるは蓋を勇と称しありあふるべしとあり
根鶏梅ふるまの家の箕田園池に云ふは伝説のゆゑを
祀りなり此編は戸徳小渡道系園貝原翁木曾侯

池を引て是之の箕田園と云ふといふなり。牛所これ
より忍川までうらうらなり右の山左の海を安房
と総お後の沖と云ふこと風雲ななりあるはなり
舟橋の表は徳もともあるは所は忍川迄の海道を
下高橋といひ田所九丁の石をよも橋といふ田所と所
との境の橋下と念を橋下といひは信根茅と所
也此の橋下○高橋の大佛といふは飯余山如來寺大
日院にあり天台宗といふと此の末に開山本堂他唱
の自作五智如來寛永十二年の起立外小石像の二五
は但唱といふは撰妙多田の産中と有馬の葉師の
はうし子ありといふなり。下高橋は有喜寺の表といふ

るありむう〜に大木の松一木とあり〜が橋の架
りてねぐら〜をりらむるふいふ糞をあらけらるる
枝葉ふか〜をり〜板の板の板〜小光る〜の板の
とゆる〜の板に橋樹葉と〜かく〜は地満きにて
山の尾〜い〜で〜葛西杉種き〜の目あふなる
処々昔は地もあゝの長の地〜人子ふ〜りて
今ハコづうふ町屋の〜りあられども今より〜
中〜
報鶴梅は波の浮舟と〜舟子〜
いの舟い女子〜の〜ヤ〜人もの〜む〜
〜む〜ふ〜め〜う〜すの〜すの〜り〜目

つて〜さ〜と〜は〜ゆ〜す〜は〜と〜小唄を
見この処を〜なる〜洞村と〜ハ二本松と
橋との名の谷ありむう〜螺の〜で〜る処とい〜
橋が糸ハ芝田町より橋白金基町二本松品川大井
村の道〜と〜一〜毎〜て〜かく〜北條氏綱と
上杉朝興と合戦ありし処なり○万松山泉岳ハ
左の〜ふあり門庵和尚の開基〜と曹洞宗の江戸
三ヶ寺のうち〜浅野家の義士早七人の石碑あり天明
より寛政の頃中〜と〜ありて〜り小人と〜
ず二月四日三月四日正月七月十六日小〜りて参詣と
る〜ガ〜を〜改〜い〜た〜ふ〜り〜も〜墓〜の〜入〜口〜小〜木〜戸〜を〜ま〜す〜け

川品

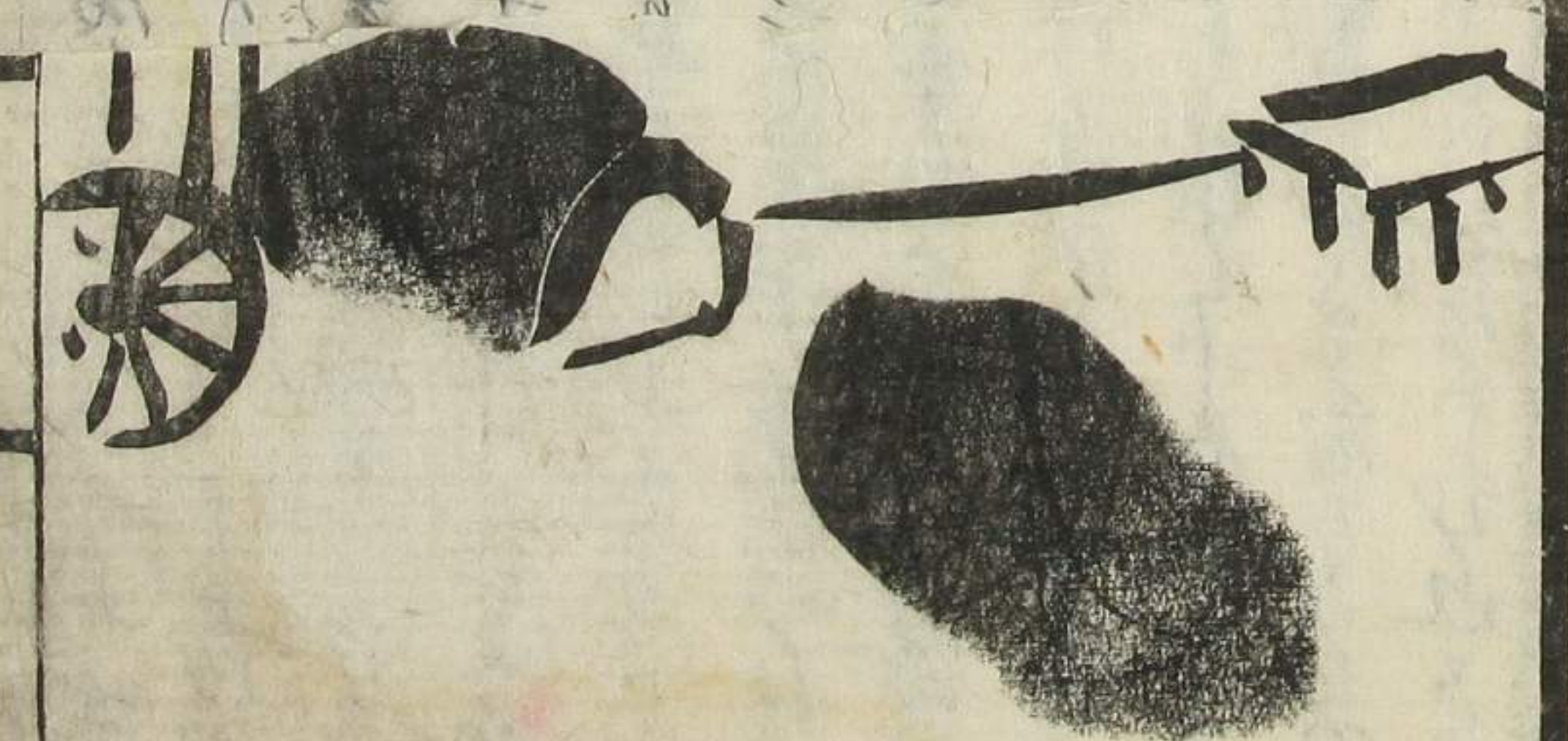
Handwritten text in a cursive script, likely representing a list of items or a narrative. The text is written in black ink on aged paper.

勿湖



匠

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or narrative from the previous page. The text is written in black ink on aged paper.



あの人々、壽、吳のおりのひとを、一、を、鞍の尻とほまらうぢり
より、鞍、民、さる、か、く、ず、一、を、さ、ら、う、の、濱、川、神、明、の、社、あ、り、は、さ、ら、
彌、沙、所、な、り、の、山、は、在、場、の、鈴、の、森、八、幡、の、宮、あ、り、盤、舟、の、神、社
と、の、此、處、と、つ、ら、お、の、傍、と、つ、ら、一、荒、蘭、崎、と、か、り、鈴、の、森
の、傍、と、つ、ら、武、彦、の、玉、の、名、處、と、つ、ら、續、浮、撰、集、小、源、家、長、朝、臣、白
波、の、つ、ら、お、の、傍、の、そ、や、れ、松、か、ら、う、ぬ、の、ら、乃、ん、ぞ、つ、れ、さ、き
又、万、葉、集、十、二、の、卷、の、け、の、つ、ら、お、の、傍、の、山、崎、と、つ、ら、や、若、
か、山、崎、と、つ、ら、一、境、内、の、山、崎、あ、り、う、と、う、せ、は、さ、ら、一、由、志、鈴、を、と、
られ、よ、う、つ、ら、此、處、を、鈴、の、森、と、よ、ま、ら、う、べ、一
根、鷄、の、今、へ、お、一、と、つ、ら、鈴、が、森、と、つ、ら、一、鈴、の、森、と、つ、ら、一、人
が、一、は、池、と、長、榮、山、と、つ、ら、一、日、蓮、宗、の、一、本、と、つ、ら、

日蓮上人後馬の地なり

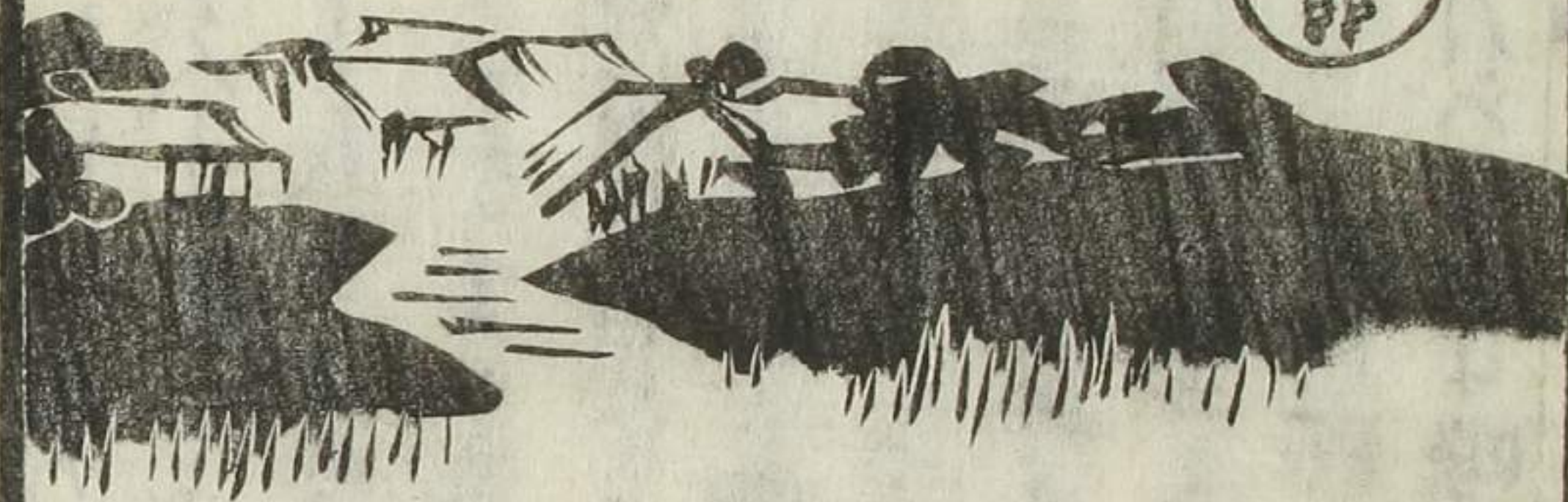
根鷄江戸志を按する、小長榮山あり、岡山日蓮上人開基日
朗上人後堂、弘安年中起、之、社、所、入、葬、葬、礼、の、地、あり、也、
あり、の、や、ま、ら、村、の、さ、ら、ら、村、の、大、森、在、石、地、新、稻、荷、布、布、称
左、天、神、の、社、あり、は、布、一、和、中、散、の、見、せ、あり、又、む、さ、ら、ら、
細、と、つ、ら、一、お、り、お、り、あり、一、桑、漬、と、つ、ら、一、を、さ、ら、う、と、つ、ら、
び、と、つ、ら、一、漬、と、つ、ら、一、を、さ、ら、う、と、つ、ら、一、は、延、の、石、地、と、つ、ら、
最、一、由、志、の、様、入、往、と、つ、ら、一、と、つ、ら、一、の、り、な、ら、お、谷、
登、と、つ、ら、一、酒、店、あり、料理、題、か、り、と、つ、ら、一、志、と、つ、ら、一、村、在、京、古、川
系、原、の、乃、あり、の、蒲、田、村、北、か、ら、一、と、つ、ら、一、南、か、ら、一、と、つ、ら、一、
ら、中、は、橋、あり、北、か、ら、一、と、つ、ら、一、新、橋、と、つ、ら、一、根、鷄、按、す、と、つ、ら、

川 崎

南 漢

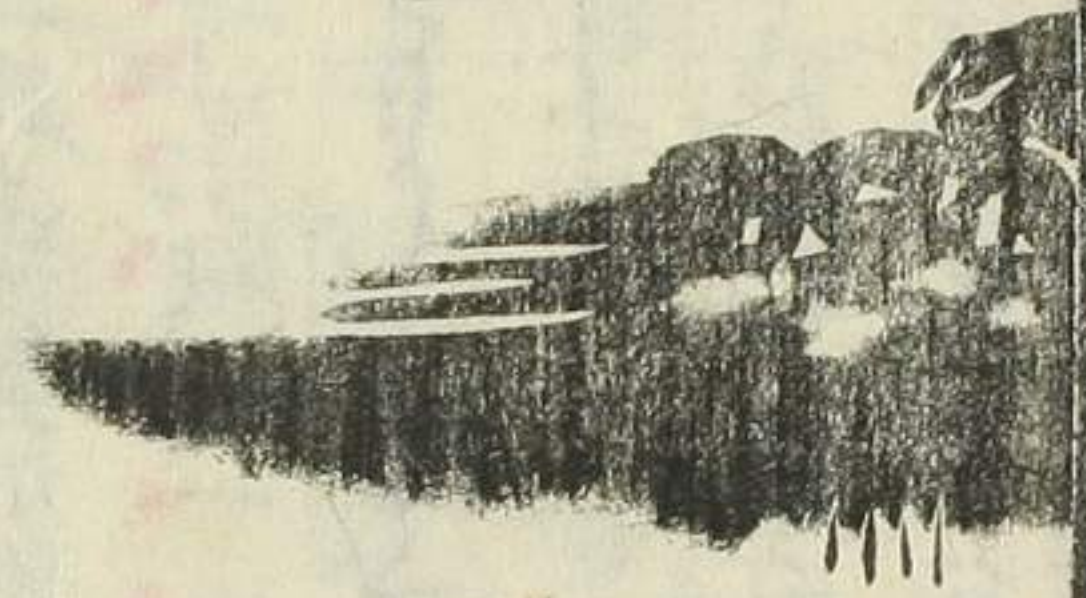


河 邊
夕 争 少



陽 中

正 高 欽



海 江 斜 原 松 葦
玄 娘 姉 樓 子 吐 舌
嗟 樸 了



あはれなる
すゝめなるの
うはさきなる
あはれなる

天 堆

川寄

川寄の金川へ二里半

此篇の入口左衣よびうち也見世ありいづれもあまの
へく様容あはく此処くは着むともうづつ是とや
すめく延宝年中金加翁山崎闇齋此処く

日午到河崎停鞆催一炊真中憑柱坐梧葉傍檐無

此意亦本牧十二天の森と云ふ本牧の沖八風つとれわ
くはぬく風ふあふとつりとるり八町
暇両方格の並本ありのちうととるり市場村の鶴見

村のむま麦の子あ村の村右の山より海へ
あり下のちんちよりむまの観者あり右の衣の山下権現乃
生あり永正七年上杉氏憲の陸上田舎人小糸子雲子
此山よたてこのりしと格り青茂くはる楚とのり

加奈川

金川の程が二里九町

此篇の根根沢様龜大黒なるをいづるとまびやう様
登ありる外は着とつらさるるあもくはくあり跡
たれは旅会商せむありしと繁島の地へ有るがれと加
奈川の甚むとの風景眺望絶ふてえりはまよふはあ

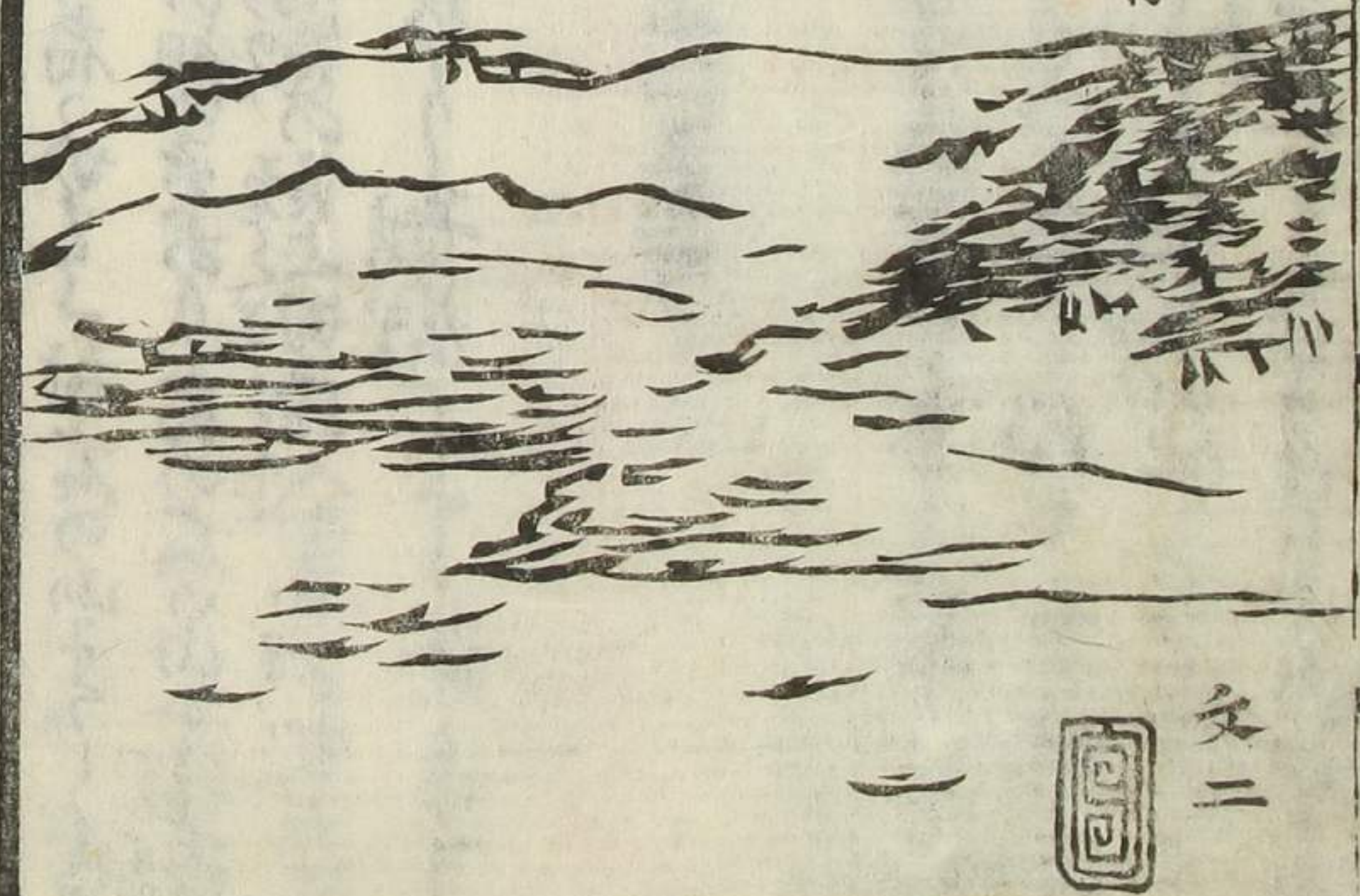
加奈川

投宿神奈川清聲一搖
孤枕不慣海陬風通宵
耿無寢

平臺逸士

留宿之記

燈子居之錦屋
晴景幽一盃東
淨地乾齋



文二

草枕之稱之誠愛

政德

心多札也

梅ヶ加形川

睡家連管友曝網
夕陽書一望子帆
新雪粉白鳥翻

明芳為繼



十五

谷ヶ程

所々名も

寒

行路高直
奇程野界
青松連枝
翠嶽際

鶴山



野ヶ谷

野ヶ谷の谷二里

Handwritten notes in cursive Japanese (sōsho) describing the landscape and journey. The text includes phrases like '山は池鏡' (The mountain is like a pond mirror) and '平野の花小' (Small flowers of the plain).

の番屋三四軒ありて料理もいと美味し衣のうへに白粉を搥
乃山あり表下と芝生やりの寺の存す人宛あり吾妻鏡
よいでる仁田四郎がゆり一ふりありて。輕沢。退分大山
へゆりあり。帷子かたびら又ハ序平もはまも沢あり。程ヶ谷
とわたりふゆ急慶長二年小帷子かたびら新町程ヶ谷と合して一
右とす

程ヶ谷

程ヶ谷ハ戸塚へ二里九丁

右の中やどたうハ小金山溪橋舎のゆりあり是より金沢
まで四里九丁とりの。此宿とひげれハ坂及之。橋を坂ハ坂

いづつてあり。長谷村武蔵と申すの隈木建するあり。隈
本もりの。志守の坂方ハ尾野軍のさりあり。觀音堂あり。衣
のて小松山ハ小山之坂の上茶屋見せあり。村屋あり。赤松橋
山橋。いげとやむとあり。柏尾村大山あり。五代橋
中橋あり。銀鷲云ハ葉柳ハ五五更橋とあり。右高村あり。こ
にひまふら屋あり。橋が長と二里長谷まで。吾妻。新町
中橋あり。一の吉田橋とて吉田村ハ屬す。長谷町の次あり。
ハ右の吾妻橋より。田橋よりハ長。いづれハ戸塚
の内あり。

戸塚

戸塚ハ藤澤へ二里

塚 戶



是六 [星真]

大家長規
驛浮燕生
來也

江山為寶 [圖]

乾坤一旅舍日月兩車輪

[圖]

路出林間雨始晴遠山
知入眼折心兼光意
老奇要何管後人之
里程 孫氏老人 [圖]

夜曉溪上
雨曉者淫
公山

蒼奇 [圖]

大

澤 藤

藤字之是字
 藤中山
 高深古帝
 月
 紫高

醒高三秋

枯藤侵曉步盤桓
 煙樹霜風淡月殘
 群動寂寥人未起
 雞聲一落遠村寒
 奧山萬



一雙

一雙不借一技節
 行盡荒郊破驛
 中詩格元來希
 老陸閑遊不負
 本家風雲山題

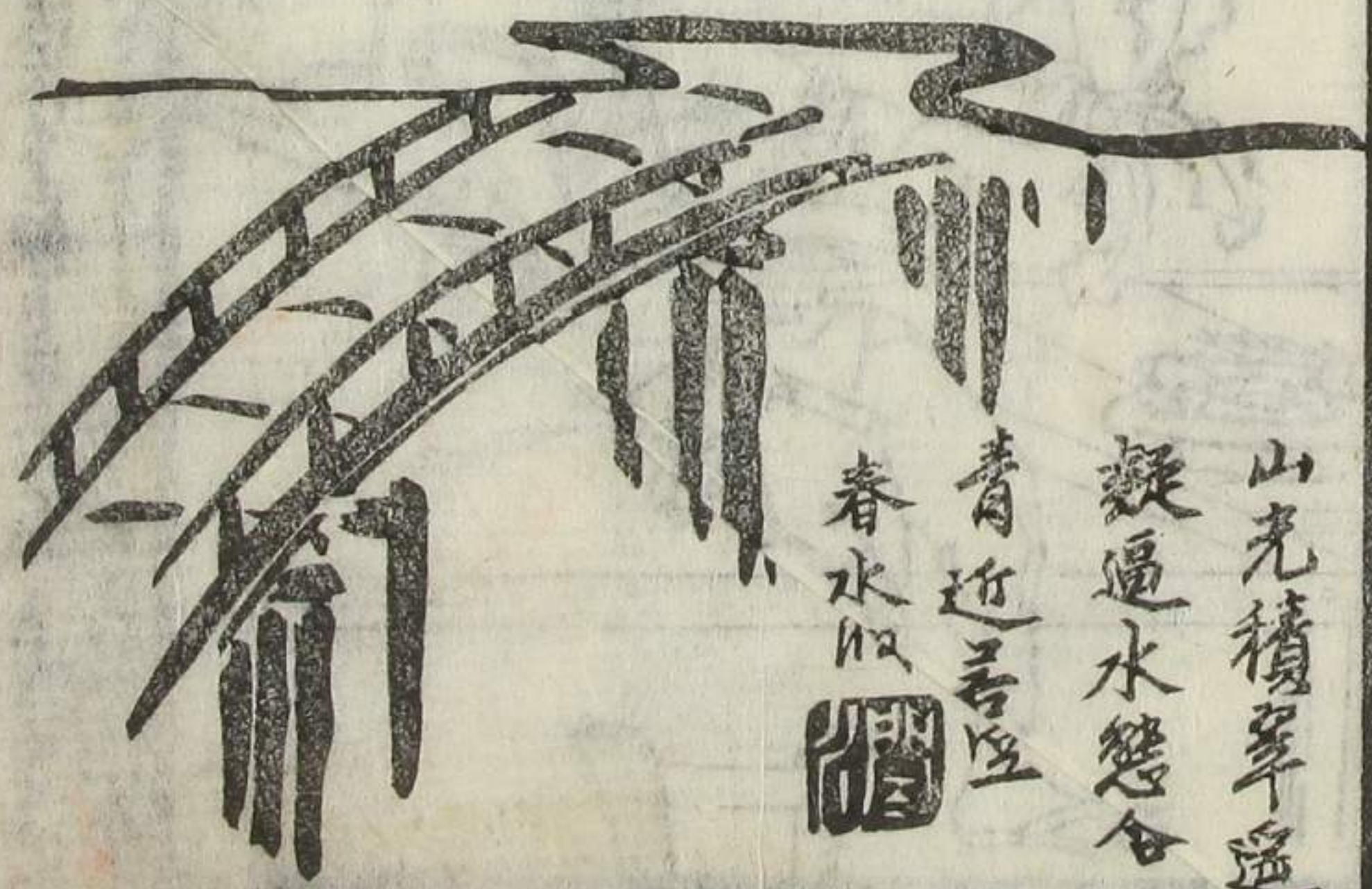
半是鷄
 聲半馬
 蹄

并思光

高仙の
 高
 高
 高

高

雲溪宮



山光積翠遙
 疑過水懸台
 青近善堂
 春水似

潤

浪懸云流生の十六日村田権子所なる秋後月本ぬと防ひてくさぐさのそまののちふ江の
 島海へを渡れりしとてそのさうりしとてそのさうりしとてそのさうりしとてそのさうりしとてそのさうりしとて
 といふ事一これれがそその家とていふ事一これれがそその家とていふ事一これれがそその家とていふ事一これれがそその家とて
 昔のすのまの
 名をてきりて
 けり大いふちのち
 ひんたれいふちのち
 といふ事一これれがそその家とていふ事一これれがそその家とていふ事一これれがそその家とて
 母子の如く月今
 ぬ一江を渡る
 舟に乗りて
 画と巧よる見
 師介りの元祿
 元禄より天保に



武運長久二世安樂所
 元祿元辰辰土月吉日

六平
 掛
 前

年をて百早
 六年ゆかり
 北の山に流る
 けいふまや一と
 の快者の大根を
 けいふまや一と
 へある。まや
 とていふけいふ
 のれきけいふ
 う一元祿のち
 快者多くいふ
 義徳を示す
 ちのそま
 て何れいふ
 けいふまや一と
 の如天益は根をどとていふ事一これれがそその家とていふ事一これれがそその家とていふ事一これれがそその家とて



藤屋

十一

くつさあうりやうして小栗と地蔵の御ふとそなり有るの遊女と
あつちて酒宴と催しはるものも小照娘とあつち遊女の御栗
小あひなれは後めぬ心より毒酒のこころひそふつぐらふ
栗こころえて飲様よとて毒をこも林のうち小あひなれを
麻毛かきこころしませぬとてこれ盗人の志とてぬすみ
まうしつらむも荒るのゆゑせひなりつあつちかきこころなり
小栗あつちとすうりもの事入るは秋室と志とてあつち
ちのりむちをあつち浮村のる小後次の子孫のうれむと上
人とたのみて三妙もあつちさけら又孫とて毒酒よつぐら
れつら十人のあつちと一人あつちれぬひあつちのり号と湯ふ
入れの事あつちの徳理権現の利生とあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

てかの盗賊とさうりつらあつちあつちあつちあつちあつちあつち
物るあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
小照天娘とあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
の頼如卿の時代南冠者乾乾の籍はあつちあつちあつちあつち
たり小栗系圖の孫とあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
銀鑄強金志とあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
とゆくとあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
又云小栗の院つらく小のいあつちあつちあつちあつちあつちあつち
幸州天龍川のあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
栗去節とあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
武のあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

宿の入口橋あり橋のまゝ左の角小茶漬見せたりは橋を言
たり左の角小洞の大音石ありとれは江の橋舟才天の
右より江の橋の入口はこれに下りては是れとすなり
は左の角の小茶漬を言ふ親を言ひは左の村と名を
つた丁やどわけを言ふ庚申堂ありは是れ眺を言ふ
くは左より田畑のみは村と名をいふ村よりの村
の左より言ふ知は稻石の社あり是より二丁のわけを渡
しあり此の言ふ左と片殿と二村ありは橋より
左の角の渡りを言ふ左の角は茶やあり酒肴販
は茶葉子の言ふおこもぐく高なる此処片殿村の御
りしては茶葉の言ふおこもぐくの言ふ左の方たなりて

左の角の言ふは橋の言ふ左の方なり左の角は
の言ふ言ふは田畑は是れと名をいふ左の角は
酒肴の言ふは言ふは茶葉あり左の角は
運ちの言ふは言ふは茶葉ありとれを先よりわけ
石の言ふ居たりは是れおこもぐくの茶葉あり左の角は
鼻の言ふは言ふは江の橋の言ふは言ふは道なりと
とすなりわけは左の角の言ふは茶葉あり是より
江の橋まで言ふ言ふは左の海なりは言ふ三四所の言ふ潮干
なりと名を言ふ潮満なりと名を言ふ潮干なりと名を言ふ
橋の言ふ潮干なりと名を言ふ潮干なりと名を言ふ潮干
ひびを言ふなりては橋の言ふなり



江ノ島

或六繪の島と云ふ又ハ葎の島根の語と云けり金龜山與額守と号す
晴ノ海の入年々千所早百とありあり清の台を絶て上清神あり

江の島の東也と尋ねる小人皇九代開化天皇の六年四月江
の浦方小ありてうらみづら夜あひどうしと磐室とてくさ
雲捲騰うと洋くさる百懸天柱をうらみす秋平の鬼神海
とふむらひのあつまり天とありよとち風と波ふけり雲
とあぐら雷とひま心潮とてうらみづら岩をけづらつ島の島と云
ちやのうらみづらうらみ鬼神のいづくづくたけく去りたれ
が即射と天けれ波あつまり磐室金紫紅の雲とてうらみ
雅樂とありてうらみ也阿含車とて黄ふむけ一人の天女舞り
あり天兵神卒四辺と圍繞せりま道の村民とるうらみ此岸

と云はる江ノ島の島根の語と云けり
都心と云ふとて磐室と云ふ
農夫ハ磐室と云ふとて磐室と云
二年とて六百九十七年とて人
皇三千代初明天皇の御宇六年
四月初よりて初めて磐室の
磐室と云ふとて磐室の鏡小建
保四年正月十五日江の島明神社
宣ありて大法忍道路へんばとて
さんけいの人舟のうらみかありとて
とて磐室中の磐室くんをさす磐室
赤代希きの神愛りり三浦左衛門尉義

と云はる江ノ島の島根の語と云けり
都心と云ふとて磐室と云ふ
農夫ハ磐室と云ふとて磐室と云
二年とて六百九十七年とて人
皇三千代初明天皇の御宇六年
四月初よりて初めて磐室の
磐室と云ふとて磐室の鏡小建
保四年正月十五日江の島明神社
宣ありて大法忍道路へんばとて
さんけいの人舟のうらみかありとて
とて磐室中の磐室くんをさす磐室
赤代希きの神愛りり三浦左衛門尉義



村武衛頼朝卿のむつらひとてうの
若み緒

寂菴

其地小寺とてとのせりは島の開基初
後小南宗小南宗小南宗つぎ小南宗
後せとて文覚上人も再興あり
は地ハ風景真妙しとて開基抄の中小山あり
の災なりとて地小海とれるありとて
島のうらち亀と似たりとて小南宗
とて小南宗とむら十二の種ありては
傳小南宗すの志に轉末流とも轉
とてなり

江の橋やさうとて波路よあとする
神いしかひの原さかへ
鴨長明



酒

江嶋

費哉

万涉

西の麓

江の橋やさうとて波路よあとする

ち神なりとて波のこもらん 舞福

江の島大系紙とて島社の神作ハ大己貴命
と久延彦命とておむせとありて天照天神と
たうとてみそ和魂とてまつらとて島主媛命と
ひらけりて此神天とてありて天女也
りあるは橋の神秘とて江の島の入口と昔ハ
本宿とていづとて和魂とていふ又西所ともい
は延左をいふ歌ありて中の通りの石段なり
の中宿本岩本院とてあり別岩を天の別當
とて本宿の龍窟とほりれり妻帯とてあり
慶安二年の所来あり客殿の願小巖本院と

東岳



城南

寶五左



かきく朝鮮の
鰐山が筆なり

○狼藉ふは書三

月二日小初り

江の高岡帳三

月七百より初

軍帳るれが本

院の室物物らとら

下とと室物の目録

と花と棲雲の具境ふ

傳ふ

刀八鬼氷門金像弘法作

阿彌陀画像弘法筆○北條氏
康證文○江島縁起五巻作者
知るる画の○太田道灌軍配團作者
○馬主○九穴貝○二岐竹○蛇
角二本



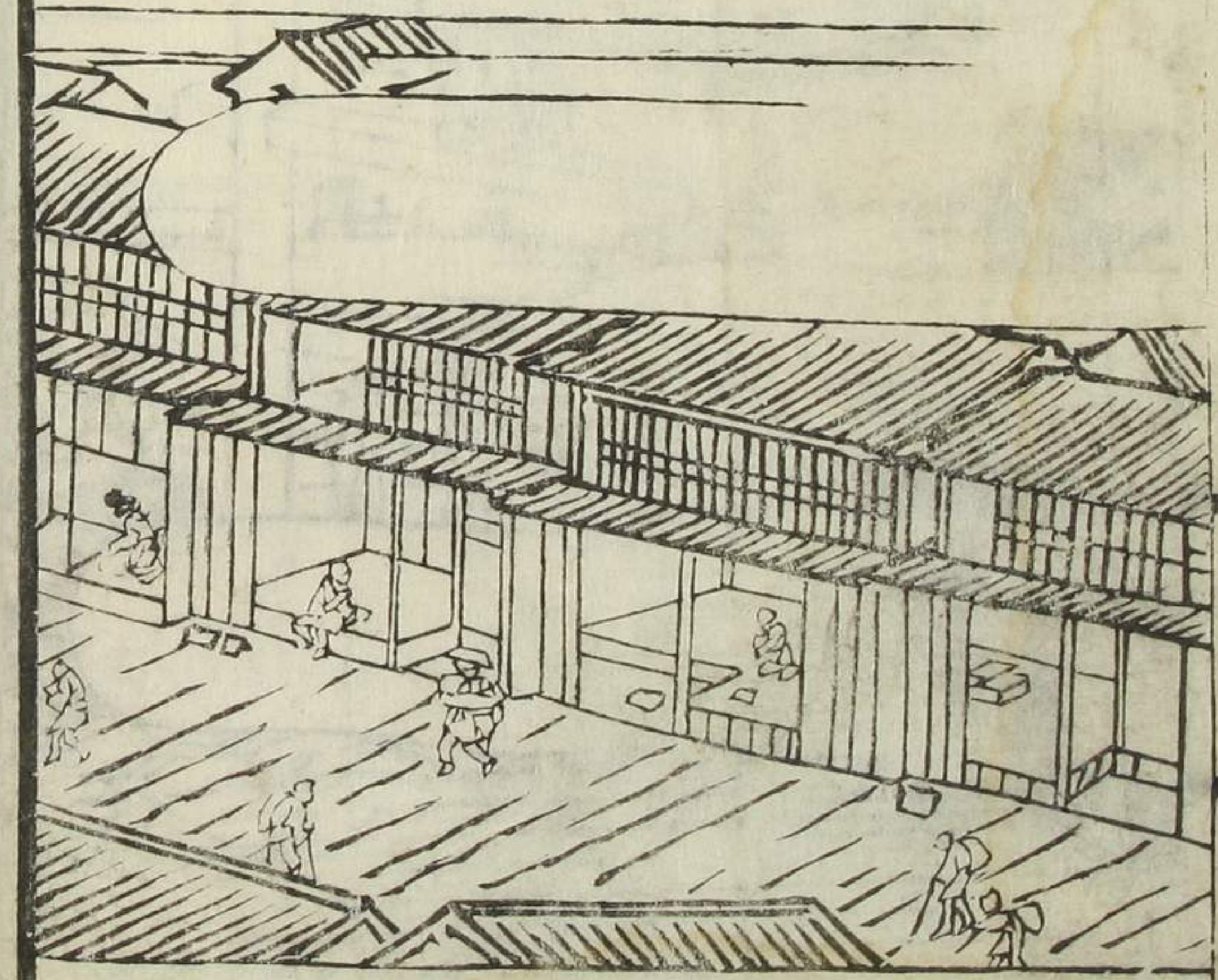
慶長九年閏八月十九日秋田常樂
院高徳寺僧住持勢冬宮のとき
蛇の角を落しとらと見て捨てり
添状あり○なる中ちやふ下の坊と



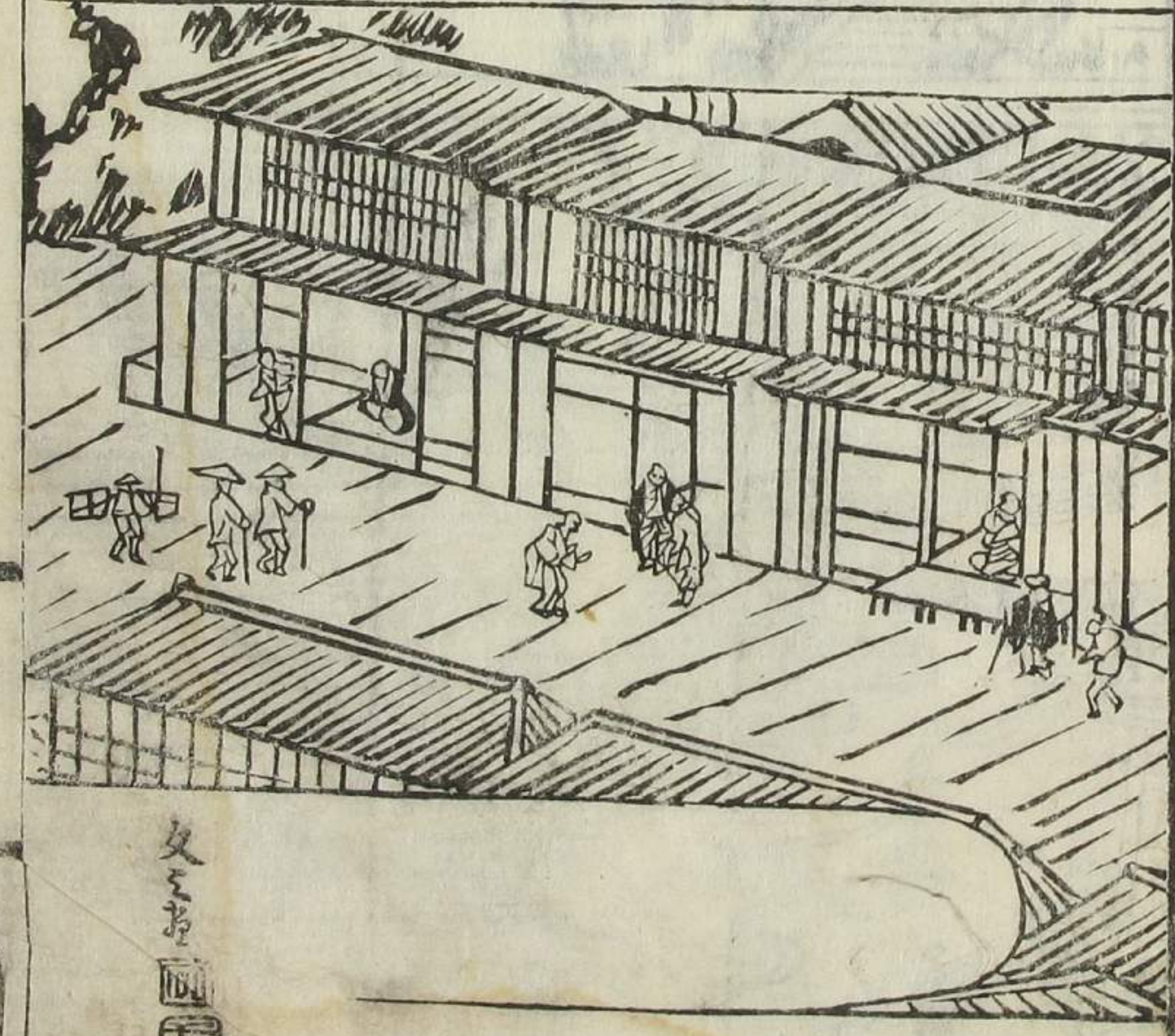
其 二 西 町 圖

煙村霞島
花多少山
閣水樓客
有亭
龍葦

春の海
鯉多む
多山と
心
り



静ま
浪
ま川北
岡山島
新女貞
はま
おの
おの
おの



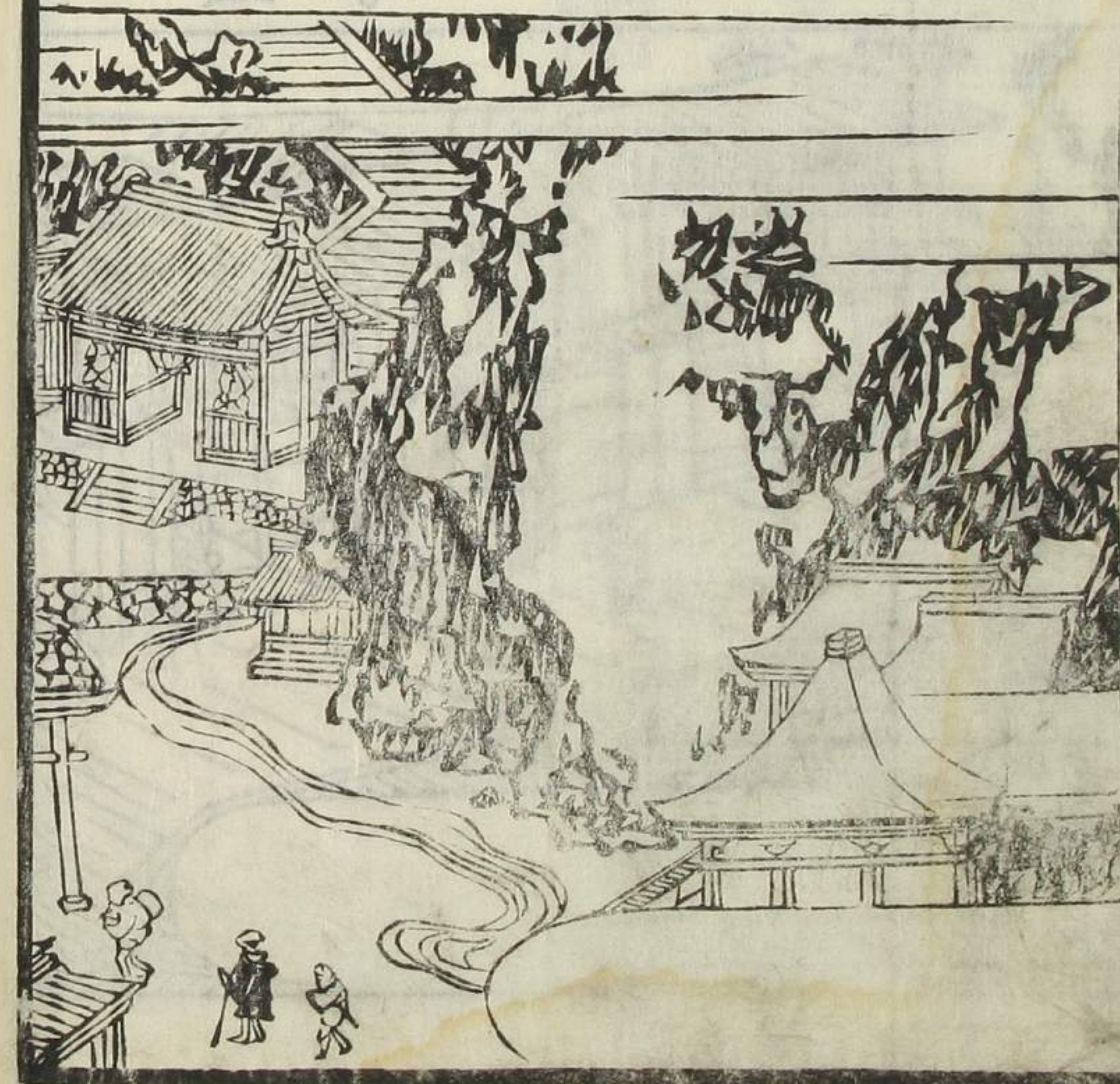
文
三
三

其三

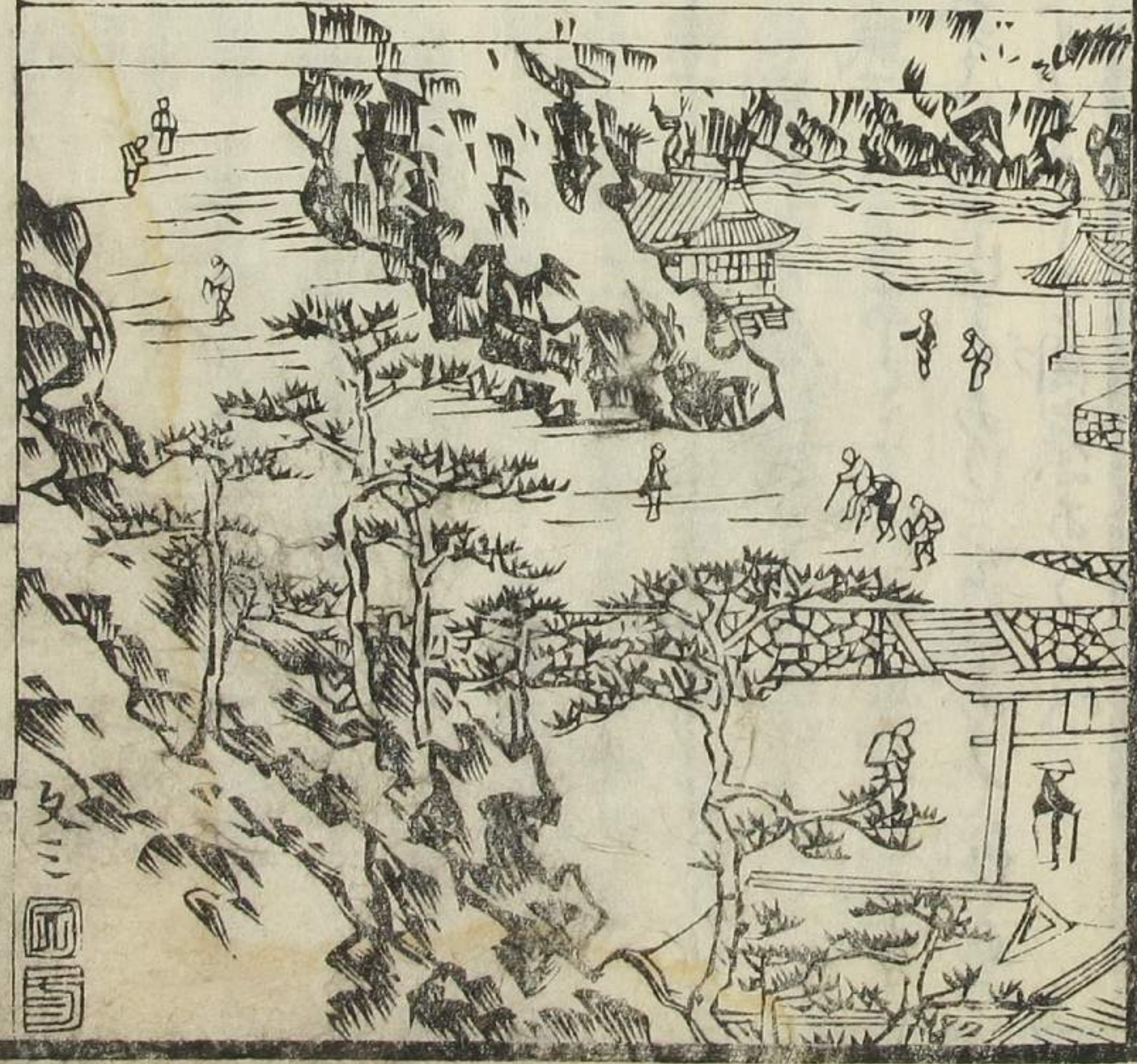
路遊沙際入
翠嶺並樓重
潮駭東林窻
雲隨函洞龍

詠齋

土ノ内
七ノ内
肩車
可玩



新張まじや
可すし紙うま
旅らるるも
八百長のつら
こゝろは居る子
のり細く
四みる細めのめ
場午めく
八百長



三

三
三



有書
出

下ノ宮

慈惠上人の因基人王十三代土所の院の序正治元年むろの法式とくらふと志をもあつて修行するに千餘日及びり爾建仁二年七月十日の夜宣の刻より岩窟の上小室雲なきひら天女壇と名視たり喜喜子お花まらへりぬそ付天女上人まづて曰吾むろ一末世の衆生と度せんがらは徳をすむと汝我らあむとをいとむむべとのこまひ一偈とまづけりふと入感涙斜すけりや〜神教と相受せり爰おいて上人領まのぢり地とえらひ神祠と造上を〜あひも像とささみ又天女の若もゆる松とてとて爰お安置なる是則下のまの像あり○三層塔坂の上あり五智堂と安す松山檢校蓮堂より○稻荷祠塔の右あり○隨身門坂の上あり天女觀と云ふ額あり○牛頭天王神輿ののこあり○仁王門小坂の上あり舟ののこあり○末社熊野神の山をたむ○鐘樓寛永十四年の移あり○石鳥居坂下あり今龜居ゆとあり○福石下のまの坂下ありむろ一松山移校年天大徳とく〜

洞齊



命形身跡車塵外
緜靈坐於亦景前

号東輝

瀧川の波もあまも夜の一花月

むの〜 さ〜波や

教るや様の 砂子ふるある

とらこの 淵四肘尾 曳尾

龍左水長碧 龍成



霞舟





五事
全

摩多
動月
智
朝
齋

以
之
為

山水
松
石



江の明やちまらけ
るりかえりてさかか
るるりてあはれつ
理輝根 遠長

江の自由
あなま

岩の

いさ

海原

たし

茶



海原空江淨
たし 木葉石
可憐 蒸雲
石上釣紗風
標為題



龍窟之圖



此詩金澤酒樓
東屋所作云余
愛其清奇載
于此 銀錫記
其詩江表其
終和連好湯約
插然酒少和彩
後有約矣
陽西采人

森々孤島峙濤中
午夕去時沙路通
聞說海神崑洞現
淵源恰是列龍宮

戲西韓和貞

靈洞望冥思
寂然吟節一日此
周旋騷人誤
認遊觀地正是長
房壺裡天

葛菴政德

孤島巖然積水連
悠壽奔浪勢凌天
遺靈千歲巖同裏
賽祀亦存金女仙

鐵雞習題

雲峰寫



鐵雞

又佐嗣渡高のまきこり神あり

瓊沙一路截波通孤嶼峻嶒峙海中潮浸龍主宙

東月花香天女廟前風客樓既繪絃々白神洞燒

燈穗々紅幾入蓬萊讀秘蹟不須幽討借仙僮

佐嗣渡高上毛相堂の今くてもおまきこり全籍を行くのまき港西岸

小徳ふ日ひのちふんおのまきおまきこりて止宿せり

本宮御旅所

岩屋の年天と神樂のまき別當社後村人列と平吉寺とて併せ

延直祭後の行列あり又十月初のまきの岩屋遷まきこりまき行列

まき同。一。拜殿の額 江のまき大御神あり。銀箔江のまき橋と接する

小建治元年九月廿三日法皇宮院宸筆と傳ら且聖旨退教傳所あり

よむけらまの歌あり建治元年より天保正筆まで五百八十二年おまきの

求聞持堂 本宮のまき。開山堂 求聞持堂のまき。末社 稻荷 天陽宗

○木柱の鳥居 上のまきより本宮へ。銅の鳥居 本宮のまきより本宮へ。石の鳥居 本宮のまきより本宮へ

○石燈籠 橋のまき。石の鳥居 岩屋のまき。石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

十六日小川のまきはるまき法縁のまき法縁のまき法縁のまき

すも。一。とつらまきはるまきはるまきはるまきはるまき

本宮のまき。○法縁のまきのまき本宮のまき本宮のまき

一。とつらまきはるまきはるまきはるまきはるまき

まきのまき小敷まき松橋亭子花とまき。一。とつら神あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

○石の鳥居 おまきこりのまきの後あり

銀鷄の白くくのうへ滑純有詩文よりきとをひ入江の白
 けし。ハケケの音。ハ浪の下等とあり又東海道長門國舎小
 菊小忍ぶの里の人とありこれハ。まふとあやまう。るる白菊
 と。いふまふをわたり

又ハ江の島の入口と高町とハ藤菅屋十二軒あり左ハ八軒右
 ハ四軒あり左の裏と橋所とハ。まふとあり左の裏
 小六軒あり

○西町驛舎右側之部

- 西町
- 亀屋三左衛門
- 左右
- 江戸屋忠五郎
- 十二
- 讚岐屋節左衛門
- 軒
- 桔梗屋十兵衛

○同驛舎左側之部

- 繪圖屋善兵衛
- 惠比壽屋茂八
- 北村屋忠左衛門
- 名主
- 橋屋武兵衛

- 紀伊國屋半六
- 堺屋弥平太
- 北村屋五郎兵衛
- 惠比壽屋吉左衛門

- 並 三友
- 中 五友
- 上 七友
- 登 二友

○西町右裏驛舎之部

- 右裏
- 北村屋伊右工門
- 中村屋勘若工門
- 六軒
- 純伊國屋作左門
- 堺屋平十郎
- 渡邊四郎兵衛
- 扇屋佐左衛門

○獵師町驛舎之部

- 池田屋傳六
- 福島屋庄右衛門
- 小松屋孫兵衛
- 名主
- 堺屋彦兵衛

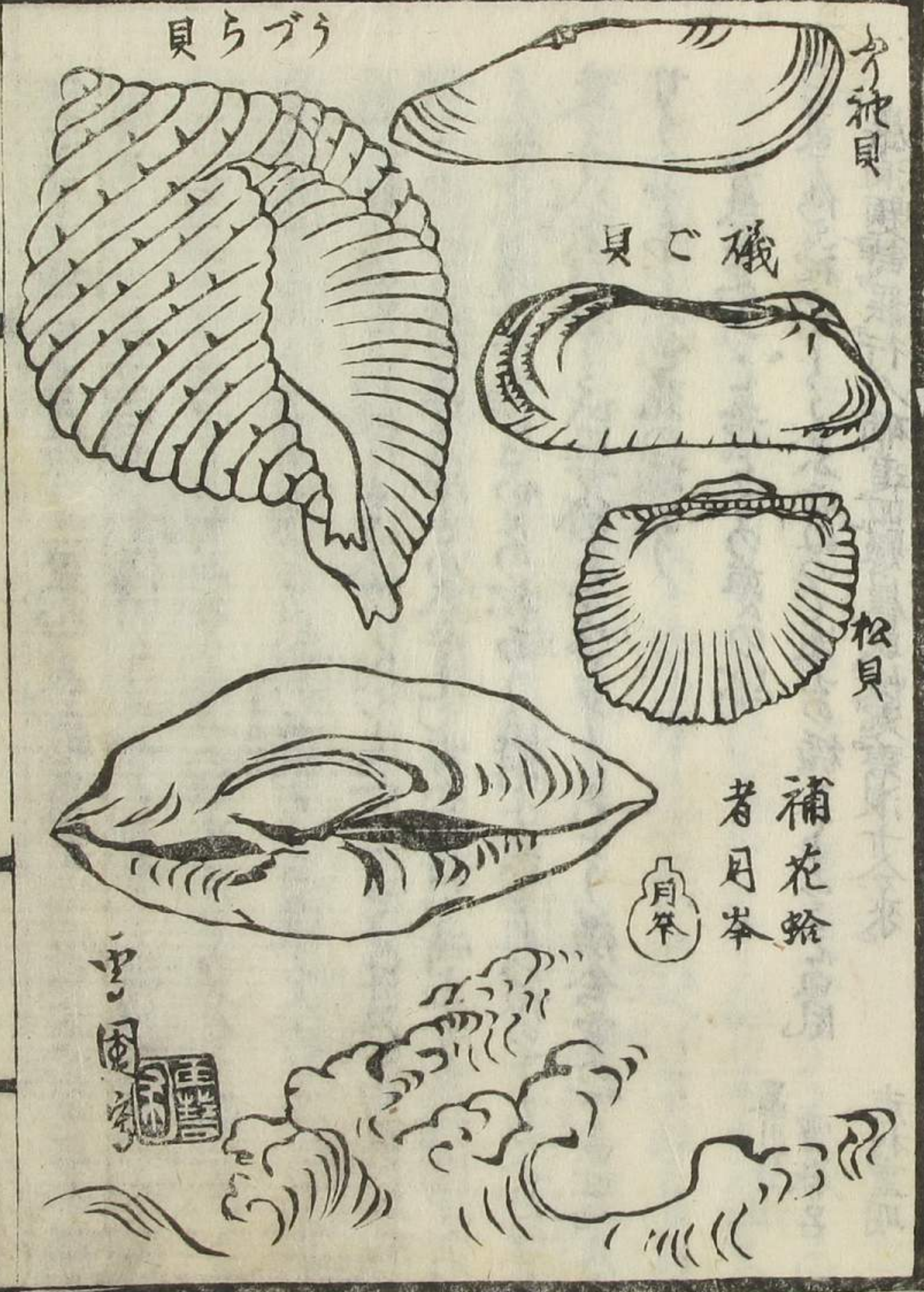
株舎 二十二軒



くらやほし貝を枝折の板さう
 又ぬくのさあやたりとふさう貝

左簾
 瓜頂

由はなありふいとけきき後ありとふ箱居の社あり町入り
 中秘の右ふ小岩居の地蔵ありまなふ小嶋あり幸うぢり入は箱の
 うもち幸うぢり入の徳し徳しありあふ名と入社の後の山本松二本ありまな
 ちと青しは処の風景絶妙なりて筆たつてく。は箱居町入
 の新場山田系町ふ修下りあり修下りまなふれまどびくは風のま
 ばりありそりゆのまなくふ貝細の屏風とく。はささなりまな
 せりは筋よりて舞臺島よりて朝細女細ふ利とく。はとく。は
 とく。は
 江の島名産
 匏の粕漬 あが ひとまの袋入 貝細とく。 江の信貝 たが
 うみわく 箱入の貝 貝細の屏風 幅海苔
 敷きし江の島りやがはるるのまなま 釋亮惠



甲申のふりかへり 儼とせり すぐちきつらにさかちかちてく
 トのぐあひのりきとせり 歩勢とさへたも馬ちりて
 とせり せとくふれをゆいてそふ過すこれひきや知れ
 一 及中持の懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 と鬼角つとれだう ありひきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 まうありた中へきとちびひきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 せり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 ことひきとせり

一 合子あふりきとせり 綱巻へりて持へり 懐中の袋ふりきとせり
 秘のしそか大切のめき物又の処方とせり 懐中の袋ふりきとせり
 道中の引とせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 懐中の袋ふりきとせり

一 道中抱ふりて 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり

さすーたふひ二三日の後とも 両具へ用をすすきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 途ちりきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 途ちりきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 途ちりきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 途ちりきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり

一 及中用をすすきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 はさみ編糸本編糸をすすきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 手ぬぐひとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 つとけとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 のきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 通下とせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 あるりのきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり
 明禁と懐中すすきとせり 懐中の袋ふりきとせり 懐中の袋ふりきとせり

新方どのとらばある一て素人とも備合のてきさるやうふは素人
 のせいのあつたもの靴一試してその素人の着るやうとあらぬ
 一 ちよびのむきもをゆきゆきもき靴のきひの人の如く中板
 を履くは接のすゝもの雨ふれはびしあまうて歩むは素
 足まなすやあらくひきさるるえあらうとて山坂又ハ素足の物
 ありいづれややむすれはあらうとありそ付足のやてやうそ
 せらぬ法ありそ法とて足ととらて一足とび小靴やうに
 いうも細小あらうべし変してすゝるやう一足の如くおやま
 小あらうて足の細くあつたのこ方のやうてあま出す足ふちの
 ちよびのむきすゝる一足あるやうふちのむきとまは左足の足と
 の力入るむきすゝる一足あり一足は銀筋年を接のしとて試みる也の
 経路の良法也
 一 及して馬駕の書とすむると歌場への入口には必あるとん

不利なればともがらふ所りすゝる素心もあまふはがは
 ことなと変してすゝるやうにばてき宣統の元とやるとさういふ
 一 よしとてむきむきも
 一 様着をる留女いぞひむきとまうやう定宿あり一
 てもさうわれずほく四人ものやむきむきとまうとて
 ひき家のうち引とるとありやうやあるといれはとて女
 ともさうちたさきむきむきとてあまもとて不通の
 りえちのあつたさうとてはひてまごあふすゝるとまはま
 小とまはひのき定宿ありばそををちて又沈みありとて
 一 ちよびのむきとて靴とて言輪はあつたさうは必固はするもの
 一 様着をるつとて湯小入るとさうつとて又供とてあはれはひ
 とらまれば紙入網走絨布を小小包のるおの湯場止持糸
 風袋受へつとてさうとて着のものとせおのれが足元をまはむきと

湯より入る一是を自くの様着をうつすそのおぼること一
 袂合着て湯ふ入り合るとたまひ翌日のあつくと徳を
 種へちのみて手燭と可なりおき燭燭と二様ありて
 小使の便由の便し手様着をうつすその徳も徳なり
 とありこれに昼のちふつきつぐぬとい使由の用あり
 小使の徳とよく見せおき徳なり

一 袂合の女子の女房をよびてなまらうとよしく怪しむ
 一とすると毒毒湿気のもよひのさるる様中へはたまに身
 る殊よあ用の及中へ袂合のさる様中へはたまに身
 ぶかりむくまじも皆袂合をたおせんそのとがらへ一と
 及すつう不吉はとすつとつらふはぐさとなあつて
 一 袂合とよく箇らとよめつ相と袂合の徳原に桃子など

一 袂合の女子の女房をよびてなまらうとよしく怪しむ
 一とすると毒毒湿気のもよひのさるる様中へはたまに身
 る殊よあ用の及中へ袂合のさる様中へはたまに身
 ぶかりむくまじも皆袂合をたおせんそのとがらへ一と
 及すつう不吉はとすつとつらふはぐさとなあつて
 一 袂合とよく箇らとよめつ相と袂合の徳原に桃子など

一 道中も食るとすつらふ平日のなかにを食しはる先へ
 食とてしつらふ平日のなかにを食しはる先へ
 とえつにいうもかき一膳を食しとあるつらふ酒も同
 平日の三つと飲む一膳は候菓子だんごはあつて
 芋の煎餅も飽食すつらふ

一 証書つきのその地の防備と密に謀る事ありて自中なる事ありて
 口と口のみならず其の隣りの口も自中なる事ありて
 ことごとく密に謀る事ありて大盗賊輩の共謀らる事ありて
 一 証書つきの防備がなれ又へおありて小川のたもとに廣く一
 必川越えざるを討つに防備の代りともいふ事ありて
 改して小川がりとある事ありて其のたもとに廣く一
 郡中の長なる狼籍文政六年七月廿日武州の事ありて
 の後正和とある事ありて小川ありて其のたもとに廣く一
 越えざるを討つに防備の代りともいふ事ありて
 らんとはばあき川越えたる事ありて其のたもとに廣く一
 となりて防備の代りともいふ事ありて其のたもとに廣く一
 なる事ありて防備の代りともいふ事ありて其のたもとに廣く一
 おのれとあげたりて其のたもとに廣く一

一 用を集り狗繩の呪といふ事ありて最重なる事ありて
 一 用を集り狗繩の呪といふ事ありて最重なる事ありて

一 用を集り狗繩の呪といふ事ありて最重なる事ありて
 一 用を集り狗繩の呪といふ事ありて最重なる事ありて

一 用を集り狗繩の呪といふ事ありて最重なる事ありて
 一 用を集り狗繩の呪といふ事ありて最重なる事ありて

はるあり乃中くくびれたるとき足とあふひすす中と藤ふ
おら況んくくくも左おわくは夏の旅にどそ足くくびを
あてるおまきいこくくじのま中流也川うまこのあまりの
場あまらうく足をひくくくくくくくくくくくくくくくく
めくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
合るすうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かひさー

銀鷲を著る者ぐ況ふ船よあひする時あとのあび死を乃
況といふすは備ゆぐれよりとづきそくまうや又著る者
さあーえええええええええええええええええええええ
も湯射しおがりくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あとのみく取死くくくくくくくくくくくくくくくくくく

はあくあとかさくけ又あふのおせつうくくくくくくくく
あを指くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
はあわさう冷あをとのせ同くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
はあお略す

○乃中くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
方して用也ー是皆年来経験の良方なり

良方煎

家方

此くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

紫蘇

葛根

麻黄

香附子

陳皮

芍薬

肉桂

甘草

右八味目方二反わくくくくくくくくくくくくく

消暑散

此くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

厚朴

白朮

茯苓

陳皮

乾姜

白蒿

參葉

草豆冠 甘草各一 右九味細末くと一度小一匁づとゆすと用ふべし

萬金一方同 あり傷くけしけしく用ひて百餘百中中治せすのを

唐蒼朮大 陳皮 半夏 薩摩厚朴 青葉藿香

山查子 葦吾神麴 麥芽中 唐木香 甘草大 大棗各小

右十二味二服と目方二匁と合せ水一合せ茶一合せ用ふべしとゆすのい

づれの食傷も利ひても速く治すると奇中の奇心

錦玉散同 水一つりと治する妙方と考ふ懐中の奇心はい

唐蒼朮大 陳皮 茯苓 薩摩厚朴各三 大棗 甘草各一

右六味細末くと一度小一匁と合せ用ふべし

枇杷葉湯同 此くすの世言よありれ方たるの治せにもあるはのち

枇杷葉湯くつら方の同くとりてはいふるも暑

にありてはいふるの治せにもあるはのちの病めも吐のとするもすらず

利ひてはいふるの治せにもあるはのちの病めも吐のとするもすらず

枇杷葉大 肉桂 白朮 干姜

義木 青葉藿香 木香 吳茱萸 甘草小

右九味二匁と合せ水二合入合せ用ふべし

如神散同 生冷菓瓜あり腹くら後痛きく又ハ船まあひつら用ひ

て速く治するの奇神の奇心はいふるの治せにもあるはのち

葛粉二 胡椒八 燒塩三 右六味細末くと一度小一匁と合せ用ふべし

くら用ふべし

鶏鳴散同 奇身と治する奇方と考ふ懐中の奇心はい

功を考ふべし 黃栢 山施子各ホ 右三味と打撲の場合に

よまるの治せにもあるはのちの病めも吐のとするもすらず

一合と合せ用ふべし

ぶく中くら奇方の治せにもあるはのちの病めも吐のとするもすらず

孔明散同 血苗の妙方と一夜のくち肉と合せ子お傳の良藥と

香附子四 当飯 熟地黄 白芍藥五 白犀角三分

右五味極細末く 煎只 少の 炒く

金玉散同 昨（？） 逆（？） と（？） あり妙方ん

刀豆（？） 蕎麥粉五分 右二味細末く へく 五分を 煎く

榆栢膏同 湯火傷（？） と治す妙方ん

石羔 黄栢 黄丹 榆白皮 桐木骨皮各ホ 右五味細末と

胡麻の油（？） と（？） 煎く 此（？） 末（？） 煎く 懐中 煎く

順賜丸同 臍脹大便通（？） 妙（？）

黄連 麻仁各三分 硝石二分 右五味細末く の（？） 丸（？） 煎く

十五（？） 煎く 煎く 煎く 煎く 煎く

煎く 煎く 煎く 煎く 煎く

煎く 煎く 煎く 煎く 煎く

萬治膏同 此（？） 煎く 煎く 煎く 煎く 煎く

いみ（？） 煎く 煎く 煎く 煎く 煎く

当飯 地黄各四分 右二味と胡麻の油（？） 合（？） の中（？） 入（？） て（？） 煎く

煎く 煎く 煎く 煎く 煎く

河豚

蟹

鯨

蕎麥

餅

酒

茸

魚鳥

燕石樓著述藏板目錄

書畫蒼粹初編三卷

刻成既不出

同一編三卷

在刻

江の濱のさざ波一卷

刻成既不出

徳余七里が濱二卷

近刻

増補闇雲愚抄二卷

全

道志と成田ほろり二卷

在刻

江の神縁日記初編二卷

全

樂天堂 佐藤了翁

藏書

